

- ・ 20 世紀の音楽は、歴史との断絶がかつてなく大きい
- ・ 伝統的な音楽の概念、作品の概念、音の概念それ自体を放棄する動きも
- ・ 新音楽と聴衆との間の隔たりが増大
- ・ さまざまな「イズム」（主義、傾向）の勃興と衰退が目まぐるしく展開
- ・ ヨーロッパにおける前衛音楽（世紀前半）、アメリカにおける実験音楽（後半）

「新ウィーン楽派」 Neue Wiener Schule

- ・ 20 世紀初頭、ウィーンで活動した前衛音楽家集団
アルノルト・シェーンベルク（1874-1951）とその弟子、アルバン・ベルク（1885-1935）とアントン・ウェーベルン（1883-1945）の 3 人組
- ・ 一派は自分たちが「ウィーン古典派」と歴史的に密接な関係があると強調
シェーンベルクは「正しく理解された、良き、古き伝統の自然の継承者」を自認
英語圏では「第二次ウィーン楽派」Second Viennese School と呼ばれる
- ・ 同時代の哲学者（アドルノ）や画家（カンディンスキー）とも親しく交流
- ・ 1908 年、調性の崩壊（1600 年頃から 300 年間続いてきた西洋音楽の根幹を破壊）
→ シェーンベルクの弦楽四重奏曲 第 2 番 第 4 楽章で無調に突入
- ・ 1921 年、無調を体系的に作曲する技法を考案
→ シェーンベルクは《ピアノ組曲》op.25 で史上初めて全曲で 12 音技法を使用